

■「大江山」本文解説②

ラ変	ナ変	サ変	カ変	下二	上二	下一	上一	四	
ら	な	せ	こ	e	i	e	i	a	未
り	に	し	き	e	i	e	i	i	用
り	ぬ	す	く	u	u	eる	いる	u	終
る	ぬる	する	くる	ur	ur	eる	いる	u	体
れ	ぬれ	すれ	くれ	ure	ure	eれ	いれ	e	已
れ	ね	せよ	こ・こよ	ey	iy	ey	iy	e	命

声に出して覚えよう！！

■「大江山」本文解説①

和泉式部、保昌が妻にて丹後に木りけるほ
和泉式部が 保昌の妻として 丹後の国に下った頃
に、都で歌合があったときに、
どに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌
詠みにあられて歌を詠みけるを、定頼中納言
(歌合に歌を出す)歌人として選ばれて和歌を詠んだが、定頼中納言
たふれて、小式部内侍、局にありけるに
がふざけて、小式部内侍が 局にいたときに
「丹後へ遣はしける人は参りたりや、いかに
「丹後へおやりになった人は戻つて参上したか。今、どんなに
心もとなく思すらむ」。と云ひて、局の前を
待ち遠しくお思いになっているだろうか。」と言つて、局の前を
過ぎられけるを、御簾より半らばかり
通り過ぎなざつたところ、(小式部内侍は)御簾から半分ほど乗り出し
て、わづかに直衣の袖をひかへて、
て、ほんの軽く(定頼中納言の)直衣の袖を捉えて、

■「大江山」本文解説②

大江山 いくの道の遠ければまだふみも
生野 行く野 主格 ク已 原因 踏み
と詠みかけけり。思はずにあさましうて、
力下用 過止 ナリ用 シク用
と(和歌を)詠み掛けた。 思いがけないことに、驚いて
「こはいかに。かかるやうやはある」と。
限定 四用 ハ用 四未打用 四用
ばかり言ひて、返歌にもあはず 袖を引き放
だけ言つて、 返歌もできず、
ちて逃けられけり。小式部、これより、歌詠
ガ下尊敬用 過止 小式部内侍は、これ以降、
逃げ去りなざつた。 力変 了用 過止 歌詠み
みの世に覚え出て来にけり。
の世界で名声が高まつたということだ。

■「大江山」本文解説③

これはまだかせての理運のことなれ
サ下用 断定已
このことは普通の当然の結果である
ども、かの卿の心には、これほどの歌、ただ
逆接 けれども、あの(定頼)卿の心の中では、これほどの和歌を、すぐさま
いま詠み出だすべしとは、知られざりけるに
サ四止 能用 四未打用 過止 断定用
詠み出だすことができるのは、お気づきにならなかったのであろう
か。や。疑問
◆「大江山」の歌(百人一首90頁)
大江山 いくの道の遠ければ
【掛詞】 生野 行く野 主格
【掛詞】 踏み 踏み 文 打止 体言止め
まだふみも見ず 天の橋立
【橋】の縁語 四句切れ
第四句と第五句は倒置法
【歌意】
大江山から生野を通つて行く野の道が遠いので、まだ天
の橋立の地を踏んでみたこともありませんし、母からの
手紙も見えていません。

「鳥飼の院」 本文解説①

亭子の帝、鳥飼の院に~~お~~はしましにけり。

サ四・用
S 作↓帝 了 用 去 止
完 用 過 止

亭子の帝が、
鳥飼の院に
いらつしやつた。

例の(こと)、御遊び~~あり~~。「このわたりのうか
いつものように、管弦のお遊びがある。」「このあたりの遊女

れめども、あまた参りて候ふなかに、声おも
 たちが、たくさん参上して控えているなかに、声が美しく

いわれのある者は控えておるか。」と(帝が)お尋ね

よしめるものは侍りや。と閑はせ。

ラ変体
ラ変・止問
K帝↓帝疑
ハ四未作↓帝尊未

八四・体
 (S) 作↓帝
 格サ四・体
 主K 作↓帝
 うかれめばらの申すやう、
 「大江玉」
 遊女たちが申し上げることは、
 になると、

淵がむすめと申す者、
めづらしき参りて

俤(り) ↓ クラ変・帝止
 「と申(まを)しければ、見(み)させ給(たま)ふに、さま
 控えております。」と申し上げたので、ご覧になると、姿や

かたちも清げなナリ用
ければ過已原因
あはれがり捨ラ用 八四・用ウ音便
(S)作↓帝

て、
上に~~あ~~あげ給ふ。
御前に召し上げなさる。

「鳥飼の院」 本文解説②

「そもそもまことか」疑問
 「そもそも(玉淵の娘なのは)本当か。」
 など問はせ給ふに
 四未作↓帝(S)作↓帝
 尊未ハ四・体

鳥飼といふ歌題で、そこにいる人たちに歌を詠ませなさつ

四_ハ体
マ_マ四_{シテ}未_{ミナク}役_{ヤク}用_{ヨウ}(S)
作_{サク}↓帝

「玉淵はいとらうあ
 玉淵は何事にも熟練して
 た。(帝が)おっしゃることは、
 仰せ給ふやう、
 元用過止 S作↓帝(S)作↓帝
 に(けり) サ下二用八四・体

りて、歌などよと詠みさく
 ク用マ用過去止
 この鳥飼といふ題
 ハ四体

をよ^{ク用}か^{ラ四・用}ま^{完_了未_定体}つ^{八用}り^{四用}た^{八用}ら^{八用}む^{八用}に^{八用}あ^{八用}が^{八用}ひ^{八用}て、まこ

この子とは恵ま^K_{サ四・未志止}る^S_{帝↓帝意止}。

「とおっしゃる」

と仰せ給ひ^S_{サ二・用ハ四・用去止}けり。

とおっしゃた。

ラ四・用
 K作↓帝
 春[△]て、すなはち、
 (娘は)承つて、すぐに、
 浅緑色に美しくかすむ、生き甲斐を感じさせる春に出会ったので、霞ではな
 いけれど、霞が立ちのぼるように、私
 もこの御殿に上がったことですよ。

あさみどりかひある春にあひぬれば

ラ変体

ハ四用完了原因

かすみならねど 断未打已
車たのぼりけり ラ四用 詠嘆止

「鳥飼の院」 本文解説 ③



と詠む、そのときに、帝は大声をあげて関心なさつて

と**義む**時に、**帝**、**あ**の**しり****あ**は**れ**が**り****給**ひ

マ^四体
ラ^四用
ラ^四用
S^{八四}作^用帝

て、
御しはたれ給ふ。
（S）
二下用
八四・止
作↓帝
人々もよく酔ひたるほ
八四用
存続体

断・定・用
 ときで、たいそうこの上もなく酔ひ泣き^{ク・用}い^{サ・変・止}と[△]にな[△]す。帝、御桂一

重ね、
かさねと、
袴をお与えになる。「ここに
変用
とある。変体
上達部、皇子た

ち、四位五位、これに物脱ぎて取らせ(ぎらむ)

ガ四用
サ二下未
打消未曲
婉体

たち、四位・五位の者で、この娘に着物を脱いで与えないような

者は、座より△ちね。」「とゆたまひ(ければ)

者は、この席から立ち去ってしまったえ。」「とおつしやたので、

四用完了命
八四・用
S作↓帝
過已
原理由

片端より、上下みな^{力二}かけ^{下用}た^{了已}れば、^{原因}かけ^{四用}た^力き

▲あまりて、二間ばかり積み上げてぞ置きたり
四用ラ 程度 マ四用 カ四用 続用存

きれずに、(着物を)二間程に積み上げて置いたそうだ。

ける。過去体

「鳥飼の院」 本文解説 ④

◆「あさみどり」の歌

あさみどり 鳥
かひある 飼 甲斐
春に ラ 変体
あひぬれば 八用 了已 原因
ね 完 理

かすみ
な
な
ね
ど

縁語
断未
打消已

またのぼり
けり

ラ用
詠止

物名 (隠題)

↓ 題を明確に詠み込まず、和歌の中に、他の語の中に紛れさせて詠み込む、という表現技法。

※掛詞

↓同音異義語を利用して、一語に二つ以上の意味を持たせるという表現技法。

【歌意】

浅緑色に美しくかすむ、生き甲斐を感じさせる春に出会ったので、霞ではないけれど、霞が立ちのぼるように、私もこの御殿に上がったことですよ。

■「買履忘度」本文解説①

鄭人有且買履者。
先自度其足而置之其坐。
至之市而忘操之。
已得履乃曰、「吾忘持度。」

鄭人に且に履を買はんとする者有り。
鄭の人に履き物を買おうとする者がいた。

先ず自ら其の足を度りて之を其の坐到に置く。
まず自分で自分の足の寸法を測つて之をその座席においた。

市に之くに至りて之を操るを忘る。
市に行く時になつて、これを手に持つのを忘れた。

已に履を得て乃ち曰はく、
すでに履き物を手にしてそこで言うことには、

「吾度を持つことを忘る。」と。

「私は寸法書きを持つてくることを忘れた。」と。

■「買履忘度」本文解説②

反歸取之。及反市罷。
遂不得履。
人曰、「何不試之以足。」
曰、「寧信度無自信也。」

反り歸りて之を取る。反るに及びて市罷む。
引き返して家に歸りこれをとつてきた。戻つてきた時には市は
終わつてしまつていた。

遂に履を得ず。
結局履物を手に入れることはできなかった。

人曰はく、「何ぞ之を試みるに足を以てせざ
人が言うことには、「どうして自分の足で履物を試さないの
か。」と。
る。」と。

曰はく、「寧ろ度を信ずるも自ら信ずる無き
言うことには、「寸法書きを信じるのはよいが、自分自身を
なり。」と。
信じることはできないのだ。」と。

■「買履忘度」句法

再読文字【且(将) A。】

且ニA(セ)ントす〔今にもAしようとする〕

否定【不 A。】

A(セ)ず〔Aしない〕

疑問【何 不 A。】

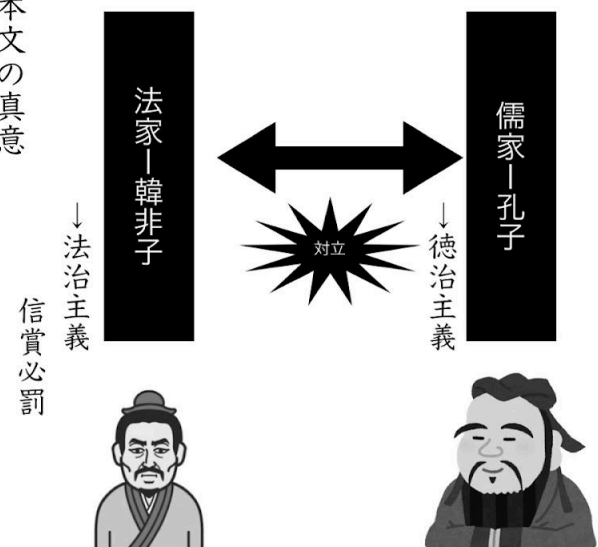
何ゾA(セ)ザル〔どうしてAしないのか〕

選択【寧 A 無 B。】

寧ロA(スル)モB(スル・スルコト)無シ

〔Aする方がよく、Bすることはない。〕

■「買履忘度」本文まとめ



この本文の真意
鄭人は履を買えなかった
なぜ？

↓度を信じ自分を信じようとしなかったから
度(書物)を信じ、自分自身(現実)を信じない
主人公の行動は儒家の書物を重んじる心から
くる。

儒家の考え方で失敗↓儒家を批判